

浦賀文化

第74号

令和5年7月1日発行

Email:uragabunka@yahoo.co.jp

浦賀での異国船応接

〜オランダ通詞と英語〜

前号で浦賀にいたオランダ通詞たちの異国船応接での役割について簡単に紹介したが、彼らに期待された役割はもちろん通詞である。オランダ通詞たちはその名の通りオランダ語を使って仕事をする者たちだったが、ペリーをはじめとする浦賀に来航した異国船は英語圏の船ばかりであった。

実は、文化元年（一八〇四年）のロシア使節レザノフ来航やその後のロシア人による樺太や択捉島の襲撃、文化五年（一八〇八年）のフェートン号事件などをきっかけに、幕府は通詞たちにフランス語・ロシア語・英語の学習を命じていた。命に従い学習を始めたとはいえ、通詞たちが本格的に英語を学習するのは嘉永元年（一八四八年）にラナルド・マクドナルドが長崎にやってきてからのことで、ネイティブスピーカーから発音などを学ぶ機会は非常に限られていた。そのような状況下で学習した英語の知識で通詞たちは異国船応接にあたっていった。

◇ ◇ ◇

文政元年（一八一八年）五月に商船ブラザース号、同五年（一八二二年）四月に捕鯨船サラセ号が来航、いずれもイギリス船であった。対応にあたったオランダ通詞は馬場佐十郎と足立左内で、どちらも江戸から派遣されている。特に馬場は「訳司必用諸厄利亜語集成」といった英会話書を編纂した語学力に秀でた通詞だった。そんな馬場がいたためかブラザース号来航時には、意志疎通に特に問題があったという記録はみられない。一方、サラセン号来航時には、船にオランダ語がわかる水夫がおり、その水夫の助けをかりて応接をしたと記録がある。語学に秀でた馬場がいたとはいえ、自分たちの得意とするオランダ語を理解する者がたまたま乗っていたということは通詞たちにとっては心強くもあり運が良かったともいえる。それからおよそ二十年後の弘化二年（一八四五年）三月、漂流民送還を目的としたアメリカ捕鯨船マンハタ号が来航した。その対応にあ

ったのは森山栄之助で、のちに長崎でラナルド・マクドナルドから直接英語を学び、幕末には森山多吉郎として幕府外交の第一線で活躍した通詞であった。しかし、当時英会話はほとんどできずに身振り手振りだったようである。マンハタン号のクーパー船長が「英語はほんの二、三語話せるだけだった」と述懐している。

その翌年閏五月、アメリカ東インド艦隊司令長官ビッドルが二隻の軍艦を率いて来航した時に対応に当たったのは森山と交代で浦賀にやってきた堀達之助だった。堀はビッドル来航時に英文の書簡を和訳したことで知られるが、ビッドルから出された書翰を和訳することで来航目的などを知ったという記録もあり、十分な英会話の力はなかったと思われる。堀は森山と違ってマクドナルドから英語を学んではおらず自学自習をしていたという。会話よりも翻訳能力に優れていたのかもしれない。また、砲術書などを翻訳していたことが知られている。

嘉永二年（一八四九年）閏四月にはイギリスの軍艦マリナー号が来航したが、このときの通詞は加福喜十郎であった。一応、加福は対応に当たったが、マリ

ナー号には「林阿多^{アトウ}」という日本語を話せる者が乗り込んでいたため意志疎通に苦労した形跡はみられない。「林阿多」は中国人を自称していたが、実は日本人漂流民で本名が「音吉」であったことはよく知られている。嘉永六年（一八五三年）のペリー来航時には、堀達之助と立石得十郎が通詞として対応した。堀は最初に英語を発したが、その後はペリー側のオランダ語通訳ポートマンを交えてオランダ語で応接が行われた。

このように通詞たちは英語を知っていたとはいえ、時に身振り手振りで、時に異国船にいたオランダ語や日本語の分かるものに助けられて対応に当たっていた。当時のオランダ通詞は異国船応接において大きな役割を果たしたとはいえるが、オランダ通詞がいたからといって円滑に応接ができたわけでもなかったのである。（山本 慧）

* 諸厄利亜：近世の学者が用いたイギリスの呼び名

★参考資料

- 『通航一覽』第六巻
- 『通航一覽續編』第四巻
- 『ペリー艦隊日本遠征記』上（万来舎）
- 『阿蘭陀通詞の研究』片桐一男（吉川弘文館）
- 『につぼん音吉漂流記』春名徹（中央公論社）
- 『開国と英和辞書』評伝・堀達之助（堀孝彦（港の人））

浦賀奉行所跡の発掘調査（その二）

ペリー艦隊来航時頃の炊出所カマド跡と出土遺物

浦賀奉行所与力の中島三郎助家に伝来した「浦賀御役所物絵図」の配置図には、焚口と鍋釜の掛け口が三つのカマド（竈）がある炊出所が描かれています。令和元年（二〇一九年）度の確認調査では、まさにその位置から嘉永六年（一八五三年）のペリー艦隊来航時にも使われたと考えられるカマドの痕跡が発見されました。

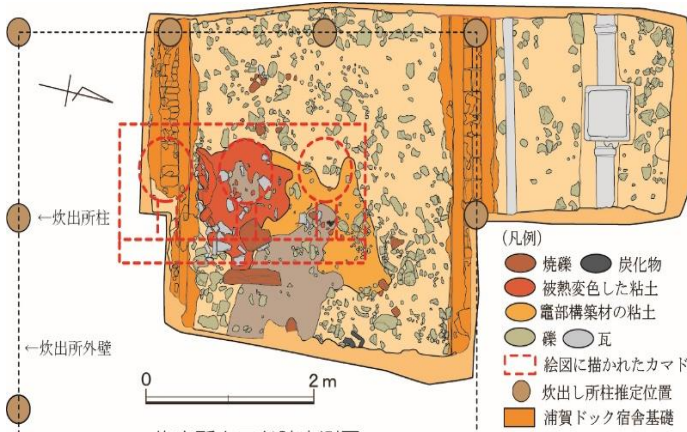
この炊出所は文政四年（一八二一年）の増改築時に築かれ、安政四年（一八五七年）には廃棄されており、カマドの基底部分のみが残っていました。



嘉永6（1853）年頃の浦賀奉行所（浦賀コミュニティセンター分館所蔵模型）



炊出所カマド跡（西側から）



炊出所カマド跡実測図

- (凡例)
- 焼礫 ● 炭化物
 - 被熱変色した粘土
 - 竈部構築材の粘土
 - 礫 ● 瓦
 - 絵図に描かれたカマド
 - 炊出し所柱推定位置
 - 浦賀ドック宿舎基礎



東海式の軒棧瓦片



カマド部材のスサ入り粘土

このカマドは瓦片を補強材として混入したスサ（稲藁などを刻んだもの）入り粘土で築かれ、焚口部分は凝灰岩切石で組まれていました。

カマド跡写真の右端は、昭和の建物基礎で壊されていますが、薪を焚いた部分で焼けて土器のように硬くなった円弧状のスサ入り粘土の壁が見えています。中央はカマド下部の潰れた状態です。焼けた粘土と補強材の焼けた瓦片が散在し、奥の焚口付近には焼けた凝灰岩切石、その奥には灰混じりの炭が散らばっています。左端部分はほとんど削られています。また、炊出所の屋根瓦と思われる愛知県東部で焼かれた東海式の軒先瓦片も出土しました。

ペリー艦隊来航時にはこの場所で浦賀奉行配下の武士たちのために盛んに炊出しが行われていた事でしょう。（中三川 昇）

- ★参考資料
- ・浦賀奉行所（役所）跡の試掘・確認調査 横須賀市教委 2021
 - ・「浦賀奉行所開設301年 浦賀奉行所跡」 横須賀市教委 2021

分館よりお知らせ

今からちょうど170年前の嘉永6年6月3日、ペリー提督率いる四隻の黒船が浦賀沖に姿を現しました。今の暦で1853年7月8日のことです。これに合わせ、ティポディエ邸シアターでは「黒船来航」をテーマとした新作映像を公開しています。当館所蔵の船の模型も協力しています。ぜひご覧ください。

よこすか近代遺産ミュージアム
ティポディエ邸

入館料：無料（シアター200円）
開館時間：9時～17時 年中無休
場所：ヴェルニー公園内

Dock Café ②

荒井郁之助は江戸湯島に生まれ、幕臣として榎本武揚・中島三郎助らと函館で戦った。五稜郭陥落後、投獄されたのちに開拓使として札幌農学校設立に貢献する。その後、初代中央気象台長に就任。気象学会の初代会長だった榎本と共に日本の気象観測の基礎を築いた。

六十一歳の荒井が集大成として選んだのが浦賀船渠株式会社設立であった。その頃の荒井の住まいは西浦賀にあり、浦賀出身の十両力士「浦の海」をお供に、太い杖を突いて、東浦賀・徳田屋に置かれた船渠設立事務所へ毎日通う姿が見られたという。初代社長の塚原周造は、当時まだ通信省に勤めており、敷地の折衝などの創設初期における実務は荒井が行っていたといわれている。

晩年の年賀状に書かれた歌からは、荒井の船渠に掛ける思いが伝わってくる。（江）

わかがあるここはすれど
ことしはや六十路の坂を
越にけるかな

